

聖書：I サムエル 31：1～13

説教題：サウル王の最期

日時：2017年10月8日（夕拝）

サムエル記第一の最後の章になりました。ここにはイスラエルの初代王サウルの死が記されています。サウルがこのような最期を迎えることについては、すでに28章19節で預言されていました。ペリシテ人との戦いを前にして、いくら主に伺っても何の答えももらえなかったサウルは、女霊媒師のところに変装して出かけ、すでに世を去った預言者サムエルを呼び出そうとします。すると何と霊媒師を通して本当にサムエルが出て来たというので読む私たちはビックリします。もちろんこれは霊媒師にそのような力があるとか、神がこれを承認しておられるという意味ではありません。ただ神はサウルに最終的宣告を語るために、今回はあえてこのような方法を用いられたということでしょう。サムエルは28章16～19節で、このようにサウルに語りました。「サムエルは言った。『なぜ、私に尋ねるのか。主はあなたから去り、あなたの敵になられたのに。主は、私を通して告げられたとおりのことをなされたのだ。主は、あなたの手から王位をはぎ取って、あなたの友ダビデに与えられた。あなたは主の御声に聞き従わず、燃える御怒りをもってアマレクを罰しなかったからだ。それゆえ、主はきょう、このことをあなたにされたのだ。主は、あなたといっしょにイスラエルをペリシテ人の手に渡される。あす、あなたも、あなたの息子たちも私といっしょになろう。そして主は、イスラエルの陣営をペリシテ人の手に渡される。』」このことの成就が今日の章に記録されています。

戦いの詳細は省略されています。まず1節でイスラエルの敗北が記されます。続く2節にはサウルの3人の息子たちの死が記されます。そして3節で攻撃がサウルに集中したことが記されます。このため、サウルはひどい傷を負い、道具持ちに「私を刺し殺してくれ。」と頼みます。彼は致命傷を受けた今、もはや生き延びるのは不可能と判断したのでしょう。それなら敵の手で殺されるより先に自分で死んでしまった方が良いでしょう。最も恥ずべき終わり方だけは避けたい。しかし道具持ちは非常に恐れて、とてもその気になれません。そこでサウルは自ら剣を取り、その上にうつぶせに倒れました。道具持ちもそれを見届けると、同じようにして死にます。こうして6節には、「その日、サウルと彼の3人の息子、道具持ち、それにサウルの部下たちはみな、共に死んだ。」と記されます。7節には、イスラエル人はこれを見て町々を捨てて逃げ、そこにペリシテ人がやって来て住んだとあります。

さらに翌日以降のことが8節以下に記されます。ペリシテ人は次の日にサウルと3人の息子たちがギルボア山で倒れているのを発見します。イスラエル人は慌てて逃げたので、遺体はそこに放置されたままだったのでしょう。そこでペリシテ人はサウルの首を切り、その武具を剥ぎ取り、自分たちが拝むアシュタロテの宮に奉納します。そしてサウルの死体をベテ・シャンの城壁にさらしました。

このようなサムエル記第一 31 章は読んでいてあまり心地良い箇所ではありません。できればじっくり読みたいとは思わない箇所です。しかし言うまでもなくこの章も私たちに大切なメッセージを語っているでしょう。それは何でしょうか。それは不従順と頑なな心で歩んだ者の最期はこのようなものであるということです。私たちにショッキングなことは、サウルはイスラエルの記念すべき初代の王であったことです。イスラエル史の中で主が王として立てられた最初の器でした。そのような特別の特権にあずかった者でも、不従順と頑なな心で歩むなら、このような最期を刈り取る。具体的に何が問題だったのでしょうか。先ほどお読みした 28 章 18 節にはこうありました。「あなたは主の御声に聞き従わず、燃える御怒りをもってアマレクを罰しなかったからだ。それゆえ、主はきょう、このことをあなたにされたのだ。」このアマレクの出来事は 15 章に記されていました。主は古い時代からの積もりに積もったアマレクの罪へのさばきとして、サウルに「彼らとそのすべてのものを聖絶せよ」と命じられました。サウルは途中までは、この命令に従いました。ところが彼は肥えた羊や牛の最も良いもの、子羊とすべての最も良いものを見た時、これを惜しんで聖絶せず、つまらない価値のないものだけを聖絶しました。サウルはこのように自分の考えによって主の御言葉を退ける人でした。とりあえずは神の言葉に従うけれども、自分がこうした方が良いと思うことがあれば、それを優先させる。神の命令と自分の考えがぶつかったら、自分の考えを取る。これでは結局、神に従っていることにはなりません。彼はこうして都合の良い時は神を利用するけれども、実際には神を軽んじる人間であることを、この出来事において決定的に表したのです。

もちろん神は1回の出来事だけを取り上げて、ことさら厳しく罰しているわけではありません。私たちが同時に考えに入れるべきは、サウルのこのような姿は、この書に繰り返し記されて来たことです。彼はアマレクの出来事よりも前の 13 章でも同じことをしました。預言者サムエルから、私が行くまで待っているようにと言われたのに、それ

を無視して、自分の勝手な考えでそれを行いました。そのことがあった上での 15 章でした。その後もずっと同じ調子です。今触れた 13 章の罪以降、サウルの歩みに何か良いことが見られたでしょうか。涙を流して「私が悪かった」とか、後悔するような発言はしましたが、結局はその路線を変えない。表面的には柔らかな人のように見えながら、実は頑な。だからずっと同じことを繰り返して来ました。何度も何度も与えられた悔い改めのチャンスをことごとく退けて自分の道を進んで来ました。そういう彼について訪れるべくして、このような最期が訪れたというのが今日の 31 章ではないでしょうか。

私たちはこのようなサウルを見る時、2 つの誤りを避けるべきでしょう。一つはサウルを自分とは関係のない、どうしようもない悪人だと見下すことです。サウルを見る時、私たちは自分の姿をそこに見るような思いにもさせられます。彼の弱さは私たちの弱さでもあります。ですから私たちはこのような箇所を読んで恐れを覚えます。しかしもう一つの誤りは、彼に共感し、同情の思いを抱くあまりに、悔い改めをしなかった彼の生活を弁護したり、肯定したりすることです。私たちはサウルに同情するあまり、こんな思いを持つかもしれません。神は少し厳し過ぎるのではないか？ご自分が立てた王なのに、これはないのではないか。愛の神として彼になおあわれみを垂れてくださることはないのだろうか、と。しかし私たちはこれまで神が何と多くの悔い改めの機会をサウルに与えて来られたことを見て来たことでしょうか。実にこのサムエル記第一の半分以上が、神の忍耐とあわれみの記録でした。ここまで読んで来て、なお神への批判の心を持つなら、それは私たちの読み方が正しくないということです。問題は神にあるのではなく、何度も与えられた悔い改めの機会をただの一度も生かさなかったサウルの側にあるのです。この 31 章にはっきり示されていることは、神はあわれみに富んでおられる方ですが、その方の招きを拒み続けるなら、ついにはこのようなさばきの日が来る！ということ。神は警告は与えるが、結局はさばかない、私たちにとって都合の良い方ではない。みことばに従わず、神に立ち返って歩まない者には、こういう報いの日が来るのです。ですから私たちも目を覚まされて、遅過ぎる日が来ない内に、自分の歩みを立て直さなければなりません。御言葉を退け続けたサウルはついにふさわしい報いを本当に、現実に刈り取ったという記録を私たちは真剣に心に留め、自分に生かす必要があるのです。

さて 31 章最後の部分は、ヤベシュ・ギルアデの人々がサウルの遺体を丁重に葬った記事で閉じられています。彼らはペリシテ人のサウルに対する仕打ちを聞いた時、すぐ

立ち上がって、夜通し歩いて行き、サウルの死体と、その息子たちの死体とをベテ・シヤンの城壁から取り外し、ヤベシュに運んで、そこで焼きました。そしてその骨を取って、ヤベシュにある柳の木の下に葬り、7日間断食しました。この彼らの行動によって、おぞましいサムエル記第一 31 章が幾分慰めの調子で終わっています。なぜ彼らはこのように行動したのでしょうか。この町の人々はサウルに対する特別な恩義を感じていました。そのことがこの書の 11 章に記されていました。彼らがアモン人に攻められた時、同胞イスラエル人はなす術がなく、ただ泣いて絶望するだけでしたが、サウルが彼らを助けてくれました。神の霊によってサウルの怒りは激しく燃え、彼はイスラエルの兵士を召集し、見事にヤベシュ・ギルアデを救いました。この町の人々は、この時のサウルに対する恩を忘れなかったのです。

このことはサムエル記第一を閉じるにあたって、サウル王の生涯のすべてが悪だったのではなかったことを思い起こさせてくれます。彼にも王らしく振るまい、理想的な活躍をした時があったのです。このことを最後に思い起こすことはある意味で慰めです。しかしこのことは、サウル王にも良いところはあったのだから、あまり彼を責め過ぎないようにしよう！という意味でしょうか。彼を否定的にばかりでなく肯定的にも評価しよう！ということでしょうか。確かに彼の生涯には良いこともあったのです。しかし改めてその「時期」に注目するなら、どういうことが言えるでしょうか。このヤベシュ・ギルアデをアモン人から救ったのは随分前のことです。彼の王として歩みの最も初期の頃です。すなわちサウルは最初はとても良かったのです。スタートは素晴らしかったのです。ところがその彼が、このようなあわれな死に方をしている。このことを見る時に思われることは、人は最後まで見なければ分からないということです。サウルは最初は素晴らしかったのに、最後はこうなってしまった。ですから私たちもこれまでの過去の歩みが良かったということは、これからの将来も大丈夫であるということの保証にはならない。昨日まで良くても、今日、道を踏み外し、明日さらに神にそむき、やがて悲惨な最期を刈り取ることに至るかもしれない。ですから私たちは気を緩めたり、慢心してはならないと戒められます。最後まで主に信頼し、従う歩みを願い求めなければならない。悲惨な最期を迎えて、昔の栄光を懐かしく思い出してせめてもの慰めを覚えるというのではなく、時間と共に益々主の恵みの中を進み、一層主の光の中を前進する者でなければと思わされます。

こうしてサムエル記第一は幕切れとなります。私たちはここまで読み進んで来て、こ

の書を落胆の思いで閉じなければならないのでしょうか。イスラエルの最初の王が悲惨な死に方をしています。イスラエルもペリシテに大敗北を喫し、チリヂリになっています。すべては失敗に終わったかのようです。しかしサムエル記はここで終わりではありません。サムエル記第一の後にサムエル記第二が続きます。本来、このサムエル記第一とサムエル記第二は一つの書でした。別々の書として書かれたものではありません。ヘブル語原典としては一つの書であったものが、そのギリシャ語訳が作られた際に2巻に分けられました。そういう意味でここはまだ途中です。神はこの後、ダビデ王を立て、用いて行かれます。何も良いことがないように見えるこの状況から、ご自身が計画下さった王による祝福の世界を導いて下さいます。そしてその神の働きは、やがてまことの王イエス・キリストを立て、その方によって神の民を究極的に救い、祝福して下さるみわざにつながって行きます。ですから私たちはこのサムエル記 31 章を前にしても、なお希望を持つことができるのです。このような落胆するような状況があっても、神はなおあわれみをもって約束の救いを実現してくださる方です。

その希望を持ちつつ、私たちはここに示されたメッセージからしっかり学びたいと思います。主はなお恵みをもって導いてくださいますが、サウルのような不服従の歩みが刈り取る最期はこのようなものであるということです。いくら王に立てられた者であっても、彼のように歩む者に祝福は与えられない。その者に対する最後の報いはさばきである。私たちは主がくださっているあわれみに感謝しつつ、自らを点検したいと思います。悔い改めの機会を退けて、ついにそれをするのが不可能なサウルのような状態に至ることがないように。彼が刈り取ったものを良く見つめて、自分自身に生かすように。もし不服従の罪が自分にあるなら、それを主に告白して、新しい歩みを願いたい。その主の恵みを頂いてみことばに従う歩みへと進み、そこに主が用意しておられる救いと祝福に生かされて行きたいと思います。「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」(15 章 22 節)